令和５年度　海外派遣研究員研究報告書

令和５年１２月１４日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　国際関係学部（生活科学研究所）
資格・氏名　教授　伊坂　裕子
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和５年度海外派遣研究員（短期Ｂ）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ

２　研究課題

社会的認知・判断における文化的影響に関する研究

３　派遣期間　　西暦　2023 年　8 月　31 日　～　2023 年　9 月　28 日

４　派　遣　先　　アメリカ（ハワイ）

５　研究目的

伊坂(2019，2020，2021)は，日本人を対象として道徳的判断や社会的認知における文化的自己観や関係流動性の影響について検討してきた。これらの研究は集団主義とされる日本で実施されたものであるが，個人主義とされるアメリカにおいても同様の結果を得られるか，調査を実施するための環境を整えること，また，調査項目の検討など，予備的検討をすることを目的とした。

新型コロナ感染症の世界的な流行では，感染症を拡大させないために個人の自由を制限するなど，各国は一時的に集団主義的な規範を導入した。感染症のフェイズに伴って，各国のコロナ対策の違いや，マスク着用など新しい行動様式の順守についての道徳意識の違いが顕在化した。また，各地で生じている自然災害においても，災害後には一時的に集団主義的な規範が高まることが知られている。一方，文化心理学においては，東洋の集団主義対西洋の個人主義という枠組みの中で，文化と心の関係が検討されてきた。集団主義とされる日本で得られた知見について，個人主義とされるアメリカと比較検討することは重要である。そのため，日本からの移民が多く，東洋と西洋の文化が融合し，新型コロナ感染症や気候変動の影響を受けると考えるハワイにおいて今後の研究につなげるための準備を整えることを目的とした。

6　研 究 概 要

過去30年間の文化心理学においては，世界を大まかに二分し，東洋の集団主義，西洋の個人主義(Triandis,1995 神山・藤原訳 2002等)において，その文化に生きる個人の人間観（相互協調的自己観―相互独立的自己観，Markus & Kitayama, 1991等）などに基づいて文化と心の関係についてのモデルを想定してきた。また，近年では，関係流動性（山岸，1998等）という社会的関係を選択できる自由度に注目する研究も増加している。2019年末から始まった新型コロナ感染症の世界的な流行では，各国のコロナ対策の違いや，マスク着用など新しい行動様式の順守についての道徳意識の違いが顕在化した。本研究は，道徳的判断など個人の価値観に及ぼす文化的影響について，相互協調的自己観―相互独立的自己観や関係流動性の観点から検討する研究の一環とする。

伊坂(2019，2020)では，文化による道徳概念の違いを検討したBuchtel，et. al.(2015)の追試を118名の日本の大学生を対象として行うとともに，道徳的判断と文化的自己観，関係流動性との関連を検討した。この調査では，ヨーロッパ，中国で何らかの悪い行動とされた28項目の行動を「不道徳」「悪いことではあるが，不道徳ではない」「悪いことではない」の３つに分類させた。その結果，日本の大学生は，中国と同様，civilizationを道徳判断の基準としていること，しかし，同時に西洋と同様に危害なども判断基準となっていることが示された。また，関係流動性を高く認識する場合に道徳的判断が厳しくなることを示した。これは，関係流動性を高く認識する個人は，自由に社会的関係を選択できると考えているが，自分がどのような関係を選択するかという場面にあっては，道徳的な基準が厳しくなるとともに，自分が選択される必要があるため，自分の行動に対しても道徳的に厳しくなると考えられる。

これらの関係は，関係流動性が比較的低いと考えられている日本社会の中における関係である。関係流動性が高いと考えられるアメリカ社会の中でこれらの関係が再現できるか検討するために必要な項目の検討など準備を行う。

また，これらの研究は，西洋の個人主義文化―東洋の集団主義文化，そして，それに対応する相互独立的自己観―相互協調的自己観といった２分法的な文化のとらえ方を背景として行われた研究である。しかし，ハワイは古くから多くの移民を受け入れ，西洋的文化と東洋的文化が融合していると考えられる。そのようなハワイの文化の中で，個人の持つ自己観は相互独立的自己観―相互協調的自己観の枠組みでとらえることができるのか，あるいは，他の次元が必要なのか，ハワイの歴史や文化をとらえる枠組みを検討する。また，関係流動性についても，移民が多いハワイにおいて同じように機能するのか検討するために，ハワイの移民の歴史，現状を検討する。

これらの目標を達成するために，1か月間の研修では，日本と関係の深いハワイ大学図書館のHawaiian Pacific Collectionなどでハワイの文化についての知見を深め，また，ハワイ大学の心理学部教授Joni Sasaki，Kristin Paukerとのディスカッションにより今後の研究の方向性を探った。

７　研究結果・成果

１）ハワイの多民族文化

ハワイは，1778 年にイギリスの探検家 Captain Cook に「発見」されたことにより，西洋社会との接触が始まった。ハワイ人は一般的に島外からのよそ者でも好意的に迎え入れ，パートナー選択にも民族的な障壁を設けなかったため，西洋世界との接触から２世代もたたないうちに，多くの混血社会が生まれた。最初は，ハワイにもともと居住していたポリネシア系と西洋系の混血が多かったが，中国や日本，フィリピン，ポルトガルなど他の国からの移民が増加し，混血は次第に複雑化した(Mullins, 2017)。その流れは現在まで続き，2020 年の国勢調査を基にした 2022 年７月のハワイの人口推計では，アジア系が 37.1％を占め，白人 25.2%，２つ以上の混血 24.7%と続き，ハワイの先住民は 10.3%となっている(U.S. Census Bureau,2023)。

西洋との交流が活発になると，ハワイにはもともと存在しなかった動植物や病原菌，アルコール，火器などが海外からもたらされた。新しい病気に対する免疫がほとんどなかったため，多くのハワイ人が命を落とした。また，伝統的な生活様式が破壊されたことが生きる意欲を失わせる引き金となったとされる(Mullins, 2017)。西洋化の流れとともに，先住民が持っていた伝統的な文化は忘れられていったが，1970 年代にハワイアン・ルネサンスが出現する。それは，文化的には，フラ，音楽，歴史，文学，工芸などハワイの伝統への新たな関心，政治的には，過去の歴史的不公正を是正するための経済的・社会的変革の要求，社会的には，ハワイアンであることへの新たな誇りとして表現された（Mullins, 2017)。

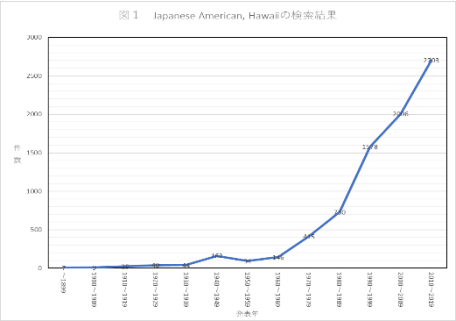
ハワイは歴史的にも，そして現在も，ハワイの先住民が持つ伝統的な文化に，西洋（白人）と東洋（アジア系）の文化が融合していると考えられる。西洋と東洋というように大まかに二分してきた文化心理学的研究に新たな視点をもたらす可能性があると考えられる。また，ハワイにおいて心理学研究を行う上では，このようなハワイの人口構成や文化的背景を考慮しなければならない。たとえば，ハワイに住む人々の民族アイデンティティは，自分のバックグランドのアイデンティティ，ハワイ人というアイデンティティ，また，multiracial というアイデンティティなど複雑な様相を呈している。社会的認知などの研究に際しては，アメリカ本土で行われているような黒人―白人，アジア人―西欧人というような比較だけでなく，ハワイの複雑なアイデンティティの影響を十分に考慮する必要がある。そのことが，文化心理学的研究に新たな視点を提供するかもしれない。

２）ハワイにおける日本の文化

ハワイにおける日系移民は，1868 年に 148 名（渡航者の人数については，148～153 名の諸説がある）の日本人が契約労働者としてハワイに渡ったことまで遡る。1900 年代前半には，ハワイの日本人は全人口の 40％を占めるまでになり，日本人に対する敵意も増大した(Mullins, 2017)。急増する日系移民を制限するため，1924 年に移民法を制定し，日本からの移民を事実上不可能とした。移民法は 1965 年に解除され，高度経済成長期の日本からの観光客が増加し，日本人投資家によるハワイの不動産取得など，日本人がハワイの経済に大きな影響を与えるようになった。

ハワイ大学の図書館は，その初期に当時の日本の明仁皇太子により多くの本を寄贈されたことから，アジア関連本に重点が置かれ，1920 年に日本学科が設立されてからアジアコレクションが今も続いている。1936 年には，オリエンタル研究所が設立され，ハワイにおけるアメリカとアジアを結ぶ研究者たちの重要な拠点となった。第二次世界大戦では，オリエンタル＆太平洋諸島のコレクションはアメリカ陸軍，海軍情報部の情報源となった(ハワイ大学ホームページ)。

ハワイ大学の図書館が所蔵する文献について，Japanese American, Hawaii のキーワード検索した結果を 10 年ごとに示したのが，図１である。1899 年までは７本の文献がヒットするのみであったが，第二次大戦中の 1940～1949 年は 169 件，その後，70 年代に入って右肩上がりに件数が増加し，2010～2019 年は 2703 件に上る。文献のタイトルから考えると，1950 年代まではベネディクトの『菊と刀』など日本の文化や仏教などについての文献が多く，1960 年代～1970 年代では日系移民の世代の違いについての文献が増加する傾向を推察することができる。また，この時期はジャパンマネーの影響を検討する経済学的な文献も多い。最近では，健康面から文化的特徴を捉える文献も目立つ。



ハワイにおける日本の文化について，「ice box に入った日本文化」という表現(Sasaki)もある。第二次世界大戦前に移住した日系１世やその子供の２世などは，その時代の日本文化をハワイに伝えた。それが，ハワイの多民族社会の中で，昔の日本文化の特徴を維持しながらも，独特の発展を遂げながら継承されていることがうかがえる。文化心理学において，東洋の代表として相互協調的自己観を持つと考えられている日本人であるが，西洋との融合の中で独特の人間観を形成している可能性が考えられる。

３）今後の調査研究に向けて

西洋の個人主義―東洋の集団主義いう枠組みの中で，個人の人間観などを考えてきた文化心理学であるが，ハワイは個人主義と集団主義の中間に位置すると考えられ，それらは道徳的判断にも影響を与えていると考えられる。さらに，単に個人主義と集団主義の中間という単純な構造ではなく，新たな視点を提供する可能性がある。道徳的判断については，Buchtel, et. al. (2015)の追試を実施した伊坂(2019, 2020)について，Joni Sasaki, Kristin Pauker とディスカッションを重ねた結果，英語の moral と日本語の道徳が同じ概念であるのか検討する必要について示唆され，今後の研究は，そこから始めることが有用であると考えられる。

（文献）

Buchtel, E.E., Guan, Y., Peng, Q., Su, Y., Sang, B., Chen, S. X., & Bond, M.H. (2015). Immorality east and west: Are immoral behaviors especially harmful or especially uncivilized? *Personality and Social Psychology Bulletin, 41,* 1382-1394.

伊坂裕子(2020). 日本人大学生の行動の道徳的判断と関係流動性・文化的自己観の関係に関する研究　商学集誌, *90*, 287-312.

Mullins, J. G. (2017). *Hawaiian Journey, Images of Yesteryear: An illustrated narrative of the history of the islands (Revised Ed).* Mutual publishing.

以　　上